

## 植物枯らすカビ

# 傷見つけて内部に侵入

植物を枯らすカビ(病原糸状菌)には、植物の傷を見つけて内部に侵入するという、これまで知られていない感染の手段があることが、京都大農学研究科の高野義孝准教授や書間敬研究員たちの研究で分かった。米科学誌「プラントセル」で7日に発

京大准教授ら  
新経路発見

表する。

キュウリやイネを枯らす炭疽病菌や、いもち病菌などのカビは、植物の表面に付くと黒い風船状の「付着器」を作り、圧力を高めて細胞壁を突き破って内部に侵入する。

高野准教授たちは、シロイヌ

## 感染防ぐ農薬開発に期待

ナスナに傷があると、炭疽病菌は孢子が発芽しても付着器を作らず、傷の近くから侵入していることを見つけた。シロイヌナスナの抗菌酵素を働かないようにして炭疽病菌に糖分を与えるなど、傷がなくても付着器を介さずに侵入した。炭疽病菌は、傷があることを傷から漏れる糖分で察知し、付着器ではない何らかの手段で弱った場所に穴を開けているらしい。

高野准教授は「今回明らかになった侵入法のメカニズムを解明できれば、収穫作業などで傷のついた農作物などへのカビの感染を防ぐ農薬の開発などにつながる」と話している。

(松尾浩道)